

西南連合大学：中国教育史上に光り輝く星

李 曦 沐

大 塚 豊 記

目 次

はじめに

1. 変遷の過程
2. 指導体制と学院・系の設置
3. 教育と生活条件
4. 際立った貢献
5. 西南連合大学発展の秘訣

西南連合大学：中国教育史上に光り輝く星

李 曦 沐*
大 塚 豊**訳

【訳者まえがき】

本論文の対象となった西南連合大学は、表題にもあるように、確かに中国の高等教育史上の光り輝く星と称せられるに値する存在である。北京、清華、南開という3大学の連合によって成立した同大学では、日中戦争下の疎開地という劣悪な条件を克服して教育研究が継続され、しかも本文で詳述されているように、平時に勝るとも劣らない優れた研究成果が上げられるとともに、そこを巣立った学生の中からノーベル賞受賞者を含む綺羅星の如き人材が生まれたのである。そして同大学については、同窓会である北京校友会によって編まれた『国立西南聯合大学校史資料』（北京大学出版社・雲南人民出版社刊、143頁）が1986年に、『国立西南聯合大学校史』（北京大学出版社刊、678頁）が1996年にそれぞれ出版されている。

さて、この論文の原筆者である李曦沐氏は1922年、中国遼寧省新賓県の生まれである。もとは李暁と名乗っておられたという。李氏は、1945年に西南連合大学歴史系を卒業し、その後官界入りした。行政官として各種の職務を歴任し、國務院所管の國家級機構である国家測繪局局長、日本流に言えば、国家測量製図局長官を最後に退官されている。西南連合大学との関係では、現在、上述した北京校友会の副会長を務めておられる。

訳者は1997年1月に北京訪問中、李曦沐氏と知り合い、疎開先の昆明での体験について聞き取りを行った際、既刊の著作・論文には見られない、実体験者のみが知る歴史の事実が生き生きと語られるの聞き、また西南連合大学が中国高等教育史上で果たした役割やその業績に関する李氏独特の見解や分析視点というものを感じた。そこで、是非とも文章として纏めておかれるように勧めたところ、数か月を経て、この翻訳のもとになった論文「西南聯合大学—中国教育史上—顆燦爛の星」が送られてきた。熟読玩味した結果、わが国の高等教育研究者にも広く紹介するに値する内容と判断したため、李氏の了解を取りつけ、訳出することとした次第である。戦時下という非常時に教育研究を維持することの困難さ、悪条件を跳ね返す人間の知恵や工夫など、平和な時代に過ごす我々がとすれば忘れがちな事どもを学ぶには、本論文はまさに好適の材料と思われる。

なお、本文中、原著者による注釈等は（ ）で、訳注は〔 〕で示した。

*元中国国家測繪局局長

**広島大学大学教育研究センター教授

はじめに

中国にかつて一つの大学があった。わずか9年間存在しただけであったにも拘わらず、人材の揺籃となり、「民主の堡壘」と称せられ、その貢献と影響の大きさゆえに国の内外に名を馳せ、中国教育史上および新民主主義革命史上に輝かしい一頁を残した。この大学こそ中国の抗日戦争時期に、北京大学、清華大学、南開大学という有名な3大学が雲南省昆明で連合して創り上げた国立西南連合大学であり、略称を西南連大または単に連大という。小論では、筆者の理解している状況ならびに同校で学んだ4年間の身近な体験に基づいて、西南連合大学の実態の一端を明らかにしてみたい。

1. 変遷の過程

1937年7月7日、蘆溝橋事件が発生し、日本侵略軍が大挙して華北に進攻した。抗日戦争の始まりであった。7月29日、30日に北平、天津が相次いで陥落した。北平の北京大学、清華大学は日本軍に占拠されて蹂躪され、天津の南開大学はさらに日本軍の砲火につつまれた。北平、天津の陥落後、政府は西安および長沙にそれぞれ1校の臨時大学を設けることを決定した。西安の臨時大学は北平師範大学、北平大学、北洋工学院を合併して組織され、後に城固に移転し、国立西北連合大学と称した。長沙の臨時大学は北京大学、清華大学、南開大学を合併して組織され、国立長沙臨時大学（略称は長沙臨大）と称したが、後に昆明に移転して国立西南連合大学と称した。長沙臨時大学の開学の日、つまり1937年11月1日は、後に西南連合大学の創立記念日と定められた。

長沙臨時大学が受け入れた学生は、主にもとの北京大学、清華大学、南開大学の3校の未卒業の学生であった。臨時大学の創設が決まった後、さまざまなルートを通じて、3大学の学生に対して長沙に来て登録するようにとの通知がなされた。1937年11月20日までに到着した3大学の学生は1,120人であり、その内訳は北京大学342人、清華大学631人、南開大学147人であった。その他に、3校以外の大学の学生で仮の在籍を許された者、北京大学、清華大学が武昌で連合して募集した新生入生、ならびに南開中学から直接南開大学に進学した新生入生など114人がおり、合計で1,452人の学生がいた。その後、学生が続々と到着の届けを行い、1938年1月の学生名簿によれば、全部で1,500人余りの学生がいたのである。

臨時大学の教員はすべて上記の3大学の者たちであった。1937年10月末までに、全部で148人の教員がおり、そのうち北京大学は55人、清華大学73人、南開大学20人であった。その後、また少なからぬ教員が転々としながら大学にやって来た。

臨時大学を長沙に建設するに当たり、同地の分校の他に兵営一部を借り、暫定的に教員と学生の居場所が作られた。長沙の校舎が不足したため、文学院は衡陽の南岳に置かれ、南岳分校と呼ばれた。

臨時大学が長沙に開学して間もなく、南京が敵の手に陥ち、これに次いで武漢の状況も急を告げるようになった。1938年1月、当局の承認を得て、大学は西の雲南省の省都・昆明市に移動することを決定した。大部分の教員と学生は香港、安南（現在のベトナム）を通して雲南に入った。200名

余りの教員と学生は旅行団を組織し、1,300キロメートル余りの長い道のりを徒歩で68日かけて行進し、昆明に到着したのである。

長沙臨時大学は西に移動した後、1938年4月2日には命を受けて国立西南連合大学と改称し、5月4日に昆明で授業を開始した。借り物の校舎は不足していたので、文法学院は暫く蒙自に置かれ、蒙自分校と呼ばれたが、数か月後に学期末試験が終了してからようやく昆明に移った。

昆明移転後、大学は一時まだ完全には安定していなかった。昆明は戦場から遠く離れていたとはいえ、日本侵略軍の爆撃から逃れることはできなかったのである。統計によれば、1938年から41年までの間に、昆明は全部で155日に及ぶ日本軍の空襲を受け、その回数は延べ322回にのぼった。連合大学も何度も爆撃に遭い、前後して軍事教官1名とその幼子、清華大学事務処の二人の事務員と工学院の1人の職員およびその夫人が犠牲となった。1943年に米軍第14航空隊が昆明に進駐してから、日本軍の昆明空襲はようやく終わりを告げたのである。この他、日本軍による侵略地域が拡大するにつれ、昆明は陸上からも脅かされるようになった。1940年7月、日本軍が安南を占領すると、教育部は「昆明はベトナム国境に隣接しており、脅威は憂慮すべき状態であり、学校は宜しく万一の準備を行うべし」として、連合大学に移転の下相談をするよう求めた。視察・検討の結果、1940年11月13日に四川省叙永に分校を設立し、新一年生600人余りを配置することが決まった。また、政府の意見に基づき、全校が何度かに分かれて次々と四川省へ移転することも検討された。後に繰り返し討議が重ねられ、移転は行わないことが決まり、1941年後期には叙永分校も取り止めになった。かくて、1946年5月4日に西南連合大学が幕を閉じ、3大学が北平と天津で再開するまで、全学の教員と学生が昆明に集まり、落ち着くことになった。連合大学は昆明でまる8年間の苦しい歳月を送ったのである。

羅庸教授が「滿江紅」〔中国語で詞牌と呼ばれ、詞調あるいは作詞時の格調を表す名称の一種であり、他に「西江月」「蝶恋花」など多くの形式がある〕に則って作った西南連合大学校歌の次の前半部分は、まさしく西南連合大学さすらいの経緯をそのまま写実描写し、芸術的に概括している。すなわち、「万里の長征を行い、五王朝の宮城〔北平〕を辞す。暫し衡山湘水に足を留めるも、またも別離す。辺境に棟梁の材〔国家枢要の人材〕を移植する〔養成する〕間、九州〔中国〕は限無く黎民〔人民大衆〕の鮮血に染まる。山城にて笳吹〔抗日救亡の戦闘ラッパを鳴らし〕弦誦〔管弦朗誦、転じて教育〕に一切の努力を傾注すれば、情熱はいっそう高まる」というものである。

2. 指導体制と学院・系の設置

西南連合大学は長沙臨時大学の時期から終始一貫して校長〔学長〕を置かず、北京、清華、南開の3大学の校長である蔣夢麟（連合大学の終結前、1945年10月には傅斯年が北京大学の代理校長となり、西南連合大学の常務委員を兼ねた）、梅貽琦、張伯苓と秘書主任とから成る常務委員会が校務全般に対する責任を負っていた。常務委員会の議長はもともと3校の校長が輪番で担当し、1年ごとに交代することに決まっていたが、後に蔣夢麟が政府の行政院秘書長となり、張伯苓が国民参政会副議長となって、二人が長期にわたり重慶に住むようになったために、常務委員会はずっと梅貽

琦が主宰し、各学院の長および事務系列各処の長が列席するようになった。蔣夢麟、張伯苓の二人と梅貽琦との関係は終始よく、とくに梅貽琦は中学のとき南開中学に学び、張伯苓の生徒であったことから、なおさら特別な関係があった。加えて、3大学の教員の中の多くの者が同窓生であったり、かつての同僚であったり、後に胡適がうまく表現したように、3大学の間には「通家のよしみ」があり、3大学間の協力は終始うちとけ隔たりがなかった。西南連合大学が幕を閉じるときに立てられた「国立西南連合大学記念碑」に文学院長・馮友蘭教授によって書かれた碑文には、「三校それぞれの歴史あり、おのおの異なる学風をもつも、八年の久しきにわたり、協力になんの隔たりなし。同は異を妨げず、異は同を損なわず、五色〔青、黄、赤、白、黒の5色〕交わり輝きて、ともに益するところ彰かなり。八音〔金、石、絲、竹、匏、土、革、木、袍の8種の材料を使った楽器の音〕和して奏で、終始和やか且つ穩やかなり」と記されている。このようなことが可能であったのは、団結して抗戦するという共通の考え方が基本にあるが、その他に、上述した人的関係も一つの重要な要因であろう。

連合大学の管理機構は、常務委員会の下に2つの会と3つの処が置かれていた。2つの会とは校務会議と教授会である。3つの処とは、初期には教務処、総務処、建設処であり、後に大学建設の任務が完了してからは建設処が廃止され、教育部の統一規定に基づいて訓導処が設けられた。3処の責任者はそれぞれ教務長、総務長、訓導長であり、いずれも教授が兼任した。

校務会議は大学の常務委員、常務委員会秘書主任、教務長、総務長、訓導長、各学院の院長および教授、副教授から選ばれた11人の代表によって組織され、大学の常務委員会主席が主宰し、毎学年に1度開催された。その職権は、大学の予算・決算、学系の設置と廃止、大学の各種規則の公布施行、建築や重要設備の配備について審議し、校務の改善ならびに常務委員会からの付託事項に関して討議することであった。

教授会は全教授、副教授によって構成され、大学の常務委員および常務委員会秘書主任が職権上のメンバーとなった。教授会は諮問機関であり、常務委員会主席の活動報告を聴き、大学の重要問題について討議し、常務委員会あるいは校務会議に対して提案を行い、またはそれらから付託された事項について討議し、校務会議に参加する代表および候補委員を選挙した。教授会もまた大学の常務委員会主席が主宰し、不定期に開催されるが、毎学年に少なくとも1度は開かれることになっていた。教授会は諮問機関であるが、大学の管理運営、教育および学生の活動の全てに対して相当な役割を果たし、影響力をもっていた。例えば、後に起こった「一二・一運動」に際して、教授会が何度も開催され、大きな役割を果たしたのである。

ここでさらに述べておかなければならないことは、大学は多くの具体的活動において教授が役割を発揮することに注意を払い、教授が構成員となり、また教授が長を務める常設あるいは臨時の専門委員会が多く置かれていたということである。そうした委員会には、例えば、図書設計委員会、理工設備設計委員会、招聘委員会、戦区学生救済および貧困学生貸付金委員会、防空委員会、校歌・校訓制定委員会、卒業生資格審査委員会、大学移転委員会などがあり、大まかに見積もっても、前後して設置された専門委員会は70余りにのぼった。これらの委員会は大学を助けて多くの仕事をこなしたが、これも「教授が大学を治める」機能を発揮する一種の有効な形式であった。

学院・系の開設に関して、長沙臨時大学の時期には3大学のもとの学院・系を合併および調整して、文科、理科、工科、法商科に17の学系、すなわち、中国文学、外国文学、歴史・社会、哲学・心理・教育、物理、化学、生物、算学、地質・地理・気象、土木、機械、電機、化学工学、経済、政治、法律、商学の各系が設置された。系には教授会が設けられ、その議長は教授の中から選ばれた。

昆明到着後、初期には引き続き長沙臨時大学と同じ学院・系が維持され開設された。しかし、後に教育部の命により、師範学院を増設し、機械工程系航空工程組を基礎として航空工学系を設立し、電機工程系の中に電信専修科を付設し、歴史・社会学系を歴史系と社会学系の2学系に分けた。また、哲学・心理・教育学系の中の教育部分を分割し、雲南大学教育系と合併して教育学系を開設し、師範学院に帰属させた。師範学院にはこの他に公民訓育、国文、英語、歴史・地理、物理・化学の各系が置かれ、その後さらに3年制の師範専修科を開設して、文学・歴史・地理、数学・物理・化学の2組に分け、大学予科の性格をもった先修班および附属中学・附属小学校を開設した。こうして、西南連合大学は文、理、法商、工、師範の5学院、26の学系、2専修科および1先修班を擁するようになったのである。

これと同時に、3大学の研究院〔大学院〕も相次いで再開され、学生の募集を始めた。そのうち、北京大学の研究院には文科、理科、法科の3研究所が設けられ、その中には中国文学、語学（言語学、音声学）、哲学、歴史学、人類学、算学、物理、化学、生物、地質、法律、経済の12コースが置かれ、1946年までに19人の研究生〔大学院生〕が卒業している。清華大学の研究院には文科、理科、法科、工科の4研究所が設けられ、その中には中国文学、外国語学、哲学、歴史、物理、算学、化学、生物、心理、地学、政治、経済、社会、土木、機械および航空、電機の16コースが置かれ、1946年までに32人の研究生が卒業している。この他、清華大学には5つの特殊研究所、すなわち国勢調査研究所、金属研究所、無線電信研究所、農業研究所、航空研究所が置かれていたが、北京への帰還前に活動を終え、その設備と人員は相応の学系に組み込まれた。南開大学には経済研究所、辺境人文研究室、理科研究所（この中には算学、物理、化学の各コースが設けられた）が置かれていた。3大学の研究院・研究所の院生は、学籍上は西南連合大学に属していなかったが、カリキュラムの編成は3校の教授が統一的に行い、相互に協力し合うとともに、教員の招聘はすべて連合大学によって執り行われた。研究院・研究所は高級研究人材の養成に対して重要な役割を果たし、当時研究生であった者の多くが後に著名な学者となったのである。各特殊研究所もそれぞれの研究テーマに関して、いずれも有益な貢献を行った。

3. 教育と生活条件

西南連合大学は対日抗戦時期に創設されたため、条件はきわめて悪く、教員・学生の生活は非常に苦しいものであった。

校舎について言えば、最初はすべて借り物であった。長沙臨時大学は湖南聖經学院の建物を借りて校舎とし、3棟の兵舎を借りて男子学生寮とし、涵徳女学校の建物の一つを借りて女子学生寮に

していた。これでもまだ建物が不足したため、文学院は衡陽の南岳に置かなければならなかったのである。昆明到着後も雲南省および昆明市の各界の人々の大いなる支援の下に、昆華農業学校を理学院の校舎として借用することができ、また他省出身者の昆明での公共的活動の場所である迤西会館、江西会館、全蜀会館を借りて工学院の校舎とし、製塩業界の倉庫を借りて工学院の学生宿舎とすることができた。これ以外には他に校舎確保の方法がなく、文・法学院は暫時蒙自に置かなければならなかった。1938年の後半、日本軍機による昆明空襲を避けて、いくつかの中等学校が郊外の県に疎開して行った後、ようやく昆華工業学校、昆華師範、昆華中学の校舎を借りることができ、蒙自から移転してきた文・法学院と新設の師範学院を配置した。またこの年には、昆明市外の西北部に120畝の荒地を購入し、粗末な材料で間に合わせて新校舎を建設した。新校舎は1939年4月に竣工し、この時点から本部および文、理、法・商学院の教室と各学院の男子寮をここに置いたのである。新校舎の建物はといえば、図書館と2棟の食堂は面積が大きいために、煉瓦と木材を用い、瓦で屋根をふくしかなかったが、その他の建物はすべて土を固めて壁とし、泥をたたいて床にし、宿舎は茅で屋根をふき、教室の屋根はトタンぶきであった。各宿舎には20台の二段ベッドが置かれ、40人が住むことができた。二つの二段ベッドの間に机が置かれ、4人が使った。両側の壁に開けられた窓には数本の木ぎれがはめ込まれているだけで、窓の紙すら張ってなかった。もし昆明の冬が比較的温暖でなかったなら、到底住むことはできなかつたであろう。

大学の蔵書と教育用の設備・備品について述べれば、この時期も非常な困難を抱えていた。清華大学は華北の時局が不穏であった戦前から、長沙に建物を建てて分校を設置し始めていた。また、密かに400箱余りの図書・機器を漢口の租界に移しておき、抗日戦争が始まった後にそれらを四川へ運び、1938年の冬には緊急に必要な130箱余りの図書を昆明に運んだが、残りのものは1940年に日本軍機の爆撃で灰燼に帰してしまった。それゆえ、西南連合大学の図書は非常に少なく、雲南大学を頼って同大学のものを借用したり、移転してきた北平図書館と協力し、また、さまざまに金を工面して一部の図書を購入手維持するほかなかったのである。全学の蔵書はわずかに11万冊であり、教員・学生が図書館で借りられる書籍は非常に限られ、教員は授業をするにも配るべき教材やプリントがなく、ただ口で話すだけであり、学生はノートを取るだけであった。機器も乏しかったため、理工科も多くの困難に見舞われ、土地の事情に合わせ、粗末なもので間に合わせる方法で幾らかの実験を行うことができただけであった。

西南連合大学の学生の多くは日本軍の手に陥っていた占領地区の出身者であり、大部分は仕送りが途絶えてしまった。大学は貸付金を準備し、学生は自炊していたが、せいぜい昼食と夕食の2食が食べられるだけであり、しかも食べるものといえば、粗末で混じりものが入った標準価格米であり、おかずも油分は少なかった。朝、金があるときには学外の屋台に行って朝食をとるが、金がなければ空きっ腹を抱えて午前中4時限の授業にでるといった具合であった。学生の大多数は新校舎に住んでいたが、そこは湯を汲むこともできなかった。学生たちは放課後になると近くの茶店に行き、一杯のお茶で半日も居座り、お茶を飲みつつ本を読み、しばしばお茶の色など全くなくなってからようやく店をでるといった具合であった。着るものにいたっては気を使うことなど全くできず、多くの者は文字通りの「着た切り雀」で、破れたり古かったりすることも気兼ねすることはなかつた。

た。こうした状況の下、勉学と最低限の生活条件を維持するために、多くの学生は学外に出かけてさまざまなアルバイトをした。家庭教師から新聞売り、正午の時報の大砲打ち等々、その内容は多種多様であった。筆者自身は2年次から卒業まで、前後して家庭教師と中学の教師をしていた。学生のなかにはどうにも勉学を続けられなくなって途中で休学し、仕事をして幾ばくかの金を稼いだ後に復学するといった者もいた。

教員の生活もまた苦しかった。抗日戦争前、教授の待遇はよく、月給は300元余りであった。当時、筆者は北平の中学に通っていたが、故郷が占領された東北からの疎開学生であったため、公費生の待遇を受け、毎月の食費はわずか4、5元だったが、まずまずのものが食べられた。従って、当時の300元というのは大変な値打ちであったことが分かる。抗日戦争期、インフレが進み、物価は上昇した。西南連合大学経済系の楊西孟教授の「数年来の昆明における大学教授の給与・手当とその実質価値」という論文の資料によれば、1937年の物価指数を100とすれば、1943下半期の生活費の指数は40,499に上昇し、400倍余りになったことになる。この当時の300元という給与は、抗日戦争前の8.30元に相当するものである。大学からは一再ならず政府に対して呼び掛けや請願が行われ、教授の給与は幾分増加したものの、物価上昇の度合いには遥かに及ばず、生活はやはりたいへんに苦しいものであった。生計を維持するため、西南連合大学の54人の教授が連名で政府に提出した報告書に見られるように、まさに「当初は蓄えの中から補填し、次いで質屋通いで食いつなぎ」「ついには質草も尽きて、どこからも借りられなくなった」のである。梅貽琦大学長のような人物でさえ、その夫人は潘光旦、袁復礼兩名の教授の夫人とともに「必勝餅」と名付けられた蒸菓子を作り、冠生園餅店に持ち込んで販売してもらい、家計の足しにしていたのである。有名な聞一多教授は家計の足しにと、中学で授業を担当し、さらに人のために篆刻もしており、彼自身が「3分の2の収入は、もっぱらこの道に依っている」と述べている。化学者の黄子卿教授は、貧困と病気がこもごも加わった自身の状況を詩にまとめ、「飯甑凝塵腹半虚，維摩病榻擁愁居。草堂詩好難驅瘴，既典征裘又典書〔釜には埃がたまり、空腹は満たされることなく、私は病床にあって愁居す。杜甫の詩ではマラリアを駆除することはできず、革衣のみならず書物までも質草となる。〕」と描写している。師範学院の蕭滌非副教授は生活困難から、ついには生まれたばかりの第三子を他家の養子に出さなければならなかった。彼は「早断」と題する詩の中で、この事について次のように詠っている。「好去嬌兒女，休牽父母心。啼時声莫大，逗者笑宜深。赤県方流血，蒼天不雨金。修江與靈谷，是爾旧山林〔さあ、お行き、可愛い娘よ。父さんや母さんに心配かけないで。泣くとき大声で泣いてはいけないよ。誰かがお前をあやしたら、可愛い顔で笑っておあげ。国はどこも大変な災難に見舞われているけれど、天から宝は降っては来ない。穏やかな河や美しい谷のあの場所こそ、お前が長く穏やかに暮らせるところだよ。〕」これらわずかばかりの事例からも、教授たちの当時の苦境を窺うことができよう。自らあの境遇に身を置いた者でなければ、これら一流の専門家・学者がどれほど切羽詰まっていたかを想像することは難しかろう。

しかしながら、状況はどうであれ、西南連合大学の教員・学生の大多数は「貧しければ益々堅固になり、青雲の志が衰えることはなく」、まさしく校歌の文句にあるように「便一成三戸，壮懷難折〔敵の手に陥らない国土や国民は少なくなったが、胸の裡の気概は容易に挫けず〕」であった。教員

は「書生報国」の熱情を抱いて、遙か辺境の地に至り、生活水準がどん底に落ちて、飴でも食すかの如くそれに甘んじ、道を伝え、学を教授し、勉学が止むことはなかったばかりか、一心に学問を継続し、書物を著し、学説を立てたのであり、少なからぬ人々がこの時期に著作を世に問うたのである。例えば、馮友蘭教授の多大な影響力をもった著作「新理学」「新事論」「新世訓」「新原人」「新原道」「新知言」の「貞元六書」、陳寅恪教授の学術的価値の高い随・唐史研究書「隋唐制度淵源略論稿」「唐代政治史述論稿」、金岳霖教授の名著「知識論」「論道」、聞一多教授の名著「神話と詩」「周易義証類纂」「楚辭校補」「爾雅新義」「庄子内篇校釈」はいずれも抗日戦争時期に西南連合大学で完成したものである。学生たちもまた質素な住居に住み、つましく暮らしていたが、志を変えず、学業を止めることなく、勤勉に学習し、あらゆることを探索した。多くの者は学識の面でしっかりとした基礎を固めたばかりでなく、政治的にも正しい方向を確立し、彼らの一生のうちできわめて重要かつ忘れ難い一頁を残したのである。

長くアメリカに暮らした中国の有名な文学者である林語堂は、1943年12月に西南連合大学を参観した後、学生を前に講演した中で、「みなさんの物質生活はまったくひどいもの（不得了）だが、精神生活は大したもの（了不得）だ」と述べた。この評価は正鵠を射たものとして、当時の人々にもてはやされたものであった。

4. 際立った貢献

貧しく困難な環境にあっても、西南連合大学はよく知れ渡っているように際立った貢献をなした。それは主に人材の養成と愛国・民主運動の二つの面に表れている。

長沙臨時大学の時期も含めて、西南連合大学に在籍した学生は前後9年間で約8,000人である。本科卒業生は3,732人、そのうち北京大学に学籍のある者369人、清華大学に学籍のある者728人、南開大学に学籍のある者195人、西南連合大学に学籍のある者2,440人であった。この他に専修科卒業生81人がおり、卒業生の総数は3,813人を数える。西南連合大学が幕を閉じたとき未だ卒業していなかった学生は、それぞれ個人の志望に基づいて北京、清華、南開の3大学に編入され、北京大学に入った者644人、清華大学に入った者932人、南開大学に入った者65人の、計1,641人であった。

上述した西南連合大学の卒業生および在學生は、その大部分が新中国において各界の専門領域や政治面での中堅幹部となり、なかには際立った貢献をなした科学者、文学家、社会活動家や政治活動家となった者もいる。例えば、華人の中で最も早くノーベル賞を獲得した有名な物理学者の楊振寧や李政道、わが国の「原子・水素爆弾の父」である鄧稼先、航空機タービンの三次元流動理論（世界の学界では「呉氏理論」と称せられる）の創始者である呉仲華、わが国の大陸間弾道弾の設計者である屠守鍔、現在全国政治協商会議副主席や中国工程院院長の職にある核物理学者の朱光亞、著名な化学者で吉林大学のもと学長の唐敖慶、著名な生化学者の鄒承魯、著名な経済学者でもと中国社会科学院副院長の劉国光、著名な作家の馬識途、汪曾祺、在米の有名な歴史学者である何炳棣、同じく数理哲学者の王浩などはいずれも西南連合大学の学生であった。1996年6月までの時点で、中国科学院および中国工程院の院士〔アカデミー会員〕898名のうち、西南連合大学のもと学生が80

人（そのうち工程院院士は10人であり、2人が両院の院士を兼ねている）で、全体の8.9%を占める。西南連合大学のもと学生で教授、研究員、高級エンジニア、編集者など各種の職務や各レベルの幹部となっている者は枚挙にいとまがない。中央および地方省庁で副部長（次官・次長）以上の職にある者は20人であり、7人は中国共産党中央委員会委員および候補委員に選ばれ、そのうち王漢斌、彭珮雲夫妻のように揃って国家指導者の列に加わっている者もいる。台湾や海外で重要な業績を挙げた者も少なくない。わずか9年間存在しただけであり、受け入れた学生の総数も約8,000人に過ぎない大学から、かくも多くの人材が生み出されるなど、めったに見られないことと言わねばなるまい。

もちろん各種の業績を収めた西南連合大学出身者は、大学入学以前に基礎がしっかりしていたばかりでなく、その後継続して努力をしたのであろう。また、連合大学を離れた後に先進国の進んだ科学の教育を受けた者もいるのであるから、彼らの業績が全て西南連合大学の賜物だなどということはできない。しかしながら、西南連合大学の時代は確かに彼らに決定的な影響を与えているのであり、この点について楊振寧は一再ならず次のように語っている。すなわち、「西南連合大学の情景を思い起こすと、私は非常に懐かしさを覚えるとともに、あのとき学校で受けた優れた教育を非常に有り難く思う」「私自身について言えば、一生のうち最も幸運だったのは西南連合大学で学べたことである。というのも、西南連合大学の教育の伝統は非常に良く、そうした伝統が私の中で最高の役割を果たしてきたのである」と。また、最近になって彼は、「私が当時西南連合大学の本科生として学んだ事柄と後に2年間碩学生として学んだ事柄は、同じ頃のアメリカの最も良い大学と比べても決して遜色がないと言うことができる」（香港出版の『今日東方』中国語版創刊号の楊振寧の文章²⁾）と述べている。楊振寧の西南連合大学に関する体験は、決して彼一人に特有のものではなく、西南連合大学の学生に間では代表的なものである。

人材の養成面で際立った業績を納めたのと同様に、西南連合大学の教員・学生は愛国・民主運動への参加とその推進においても際立った貢献を行ったのであり、このことは人材の養成と密接に結びついている。早くも長沙臨時大学のときには、大学の中の愛国的な情熱はきわめて高まり、少なからぬ学生が抗日戦争工作への直接参加を要求し、教員の中には「政府の指示を待って、前に進んで抗日戦争工作へ参加するか、あるいは後方で生産に参加するか、少なくとも民衆教育の面で幾らか力を出してもよい」との意思を表明する者がいた。この頃、大学を離れて前線や延安などで直接抗日闘争に加わった学生は300人余りの多数にのぼった。後に中国共産党中央政治局常務委員となった宋平（在学中の名前は宋延平）、国民党軍の重要な将領の胡宗南のところで長期にわたり地下工作に従事し、数奇な経歴に富んだ熊向暉（在学中の名前は熊匯荃）は、この頃に大学を離れて延安や部隊に赴いた者たちである。大学が昆明に移って西南連合大学と改称した後、当初の一時期、抗日救亡の宣伝を主要な内容とする愛国・民主運動の活動もきわめて活発であった。1941年1月6日、国民党の軍隊が共産党の指導する新四軍を包圍攻撃した皖南事変以後、白色テロ下の大学には一度ひっそりとした空気が流れたが、1942年1月6日に西南連合大学の学生が「孔祥熙打倒運動」を発動し、デモを挙行して、香港が陥落し、多くの有名な人々が困惑の真っ直中にあるとき、国民党政府の行政院副院長の孔祥熙が中華航空の飛行機で重慶から自宅の飼い犬を運び、国難に乗じて金儲

けをした罪悪行為を声高に攻撃した。「孔祥熙打倒運動」は武漢大学、浙江大学の学生の積極的な呼応を得て、大後方〔日本軍の勢力の及ばなかった四川、雲南、陝西、甘肅などの地域〕全体を揺るがせた。1944年春、日本侵略軍は中国大陸を南北に縦断する主要幹線〔北京―漢口を結ぶ京漢線、漢口―広州を結ぶ粵漢線を指す〕を確保するための攻勢をかけ、河南から南へ向かって侵攻したのに対して、国民党軍は総崩れとなり、数か月を経ずして数省を失い、重慶、昆明ならびに大後方全体を震撼させた。このときの惨敗は、反共には積極的で、抗日には消極的な国民党当局の姿勢、ならびに専制的独裁や汚職・腐敗の横行が作り出した重大な結果や危険な局面をいっそう暴露した。西南連合大学の愛国的な教員・学生の憂いは深まり、新たに愛国的な民主運動の高まりが起こった。彼らは何度も昆明で率先して集会やデモを行い、宣言や声明を発表して、国の大方針決定のための会議を開催し、連合政府を成立させて、抗日戦の勢力を増強するよう要求した。こうしたことは大後方全体に大きな政治的影響を及ぼし、西南連合大学は「民主の堡壘」と呼ばれるようになった。日本侵略軍の降伏、抗日戦争での勝利の後、国民党政府が国共内戦を引き起こすと、西南連合大学は再び内戦に反対する時事報告会を開催し、反動的当局が会場の外で銃砲を発射するという恫喝や威嚇に遭いながらも、昆明全市の大学、中学でのストライキを実現させた。1945年12月1日、凶悪極まりない反動当局がさらに暴徒やスパイを組織して西南連合大学を襲わせ、西南連合大学の学生二人、中学教師一人、中等専門学校の学生一人の、計4人を殺害するという「一二・一事件」を引き起こした。昆明全市の大学生・中学生の憤りは極限に達し、ストライキ闘争を継続して、犯人の懲罰と内戦停止を要求した。全国各地では声援が沸き起こった。これが周恩来をして「新たな『一二・九運動』〔1935年12月9日、北京の学生が日本の傀儡・冀察政務委員会の成立に抗議して行った大規模なデモおよび内戦停止・日帝打倒を求める大衆運動〕」と呼ばしめた有名な「一二・一運動」であり、解放戦争期における第二戦の火蓋が切られることになったのである。

「一二・一運動」で勝利をおさめ、西南連合大学が幕を閉じ、北方への復員を行った後、昆明では再び「李・聞事件」が起こった。学生から深く愛されていた聞一多教授と民主的人士の李公朴が国民党のスパイに撃ち殺されたのである。これ以後、雲南に残っていた幾人かの西南連合大学の学生は共産党の地下工作や人民解放軍の雲南・広西・貴州縦隊〔軍団〕の武装闘争に加わり、指導幹部となった。一方、北方へ帰還し北京大学、清華大学、南開大学で勉学を継続していた学生は、米軍兵士による北京大学女子学生暴行事件に対する抗議運動や反飢餓・反内戦闘争の中で率先して中心的役割を果たし、また直接解放区へ赴いて解放工作に参加した者もいた。

西南連合大学の教員や学生の中から、聞一多、齊亮、劉国鈺（小説『紅岩』中の劉思楊のモデルとなった人物）ら、前後して15名の烈士が民族や人民の解放のために尊い命を捧げた。現在、清華大学のキャンパスに建っている「清華大学関係烈士記念碑」に刻まれた革命に殉じた人々の名前のうち3分の1は、西南連合大学の教員と学生である。まさしく愛国・民主運動の中で教育や鍛錬を受け、また英雄的に革命に殉じた人々の献身的精神の感化を受けて、ますます多くの西南連合大学の学生が絶えず自覚を高め、人民に奉仕する道を歩み、革命や建設の事業の中の中心人物に成長していったのである。

5. 西南連合大学発展の秘訣

あのような粗末で苦しい条件の下で、西南連合大学はなぜかくも際立った重要な貢献を為すことができたのであろうか。このことは中国国内の人々がしばしば持ち出し検討する問題であるばかりでなく、外国にも深い関心を示す者がいる。米国ヴァージニア大学歴史学科のジョン・イスラエル（華名は易社強）教授は、この問題について十数年にわたる研究を続け、そのために何度も中国大陸や台湾で訪問調査を実施した。イスラエル教授によれば、「西南連合大学は中国の歴史上、最も意義深い大学であり、最も苦しい条件の下で最も優れた教育の方式を保持し、最も優秀な人材を養成したのであり、最も研究に値するものである³⁾」という。実のところ、われわれ西南連合大学出身の者から見ると、この問題は決して複雑ではないことが分かる。われわれの身近な体験から言えば、主な原因はだいたい以下の数点に要約できるであろう。

第一に、西南連合大学には当時の全国で最も強力かつ最も優秀な教師陣と、厳格な試験を経て入学許可され、国家や民族の命運に対して強烈な憂いを抱いていた学生が集中していたことである。

西南連合大学の校務を中心となって掌握していた常務委員で清華大学校長の梅貽琦が発した名言がある。「いわゆる大学というのは、大きな建物を有するものを言うのではなく、偉大な教師を有するものを言うのである⁴⁾」と。西南連合大学には大きな建物などなく、わずかに粗末な部屋があるのみであったが、そこには北京、清華、南開という一流大学3校の教員が集中しており、偉大な師や抜群の専門家が確かに数多く含まれていたのである。例えば、哲学系には有名な哲学者の馮友蘭、湯用彤、金岳霖、賀麟、沈有鼎、馮文潛、鄭昕、洪謙、王憲鈞といった先生がおられた。中文系には文学、語学、文字学の分野の著名な学者・専門家である聞一多、朱自清、羅常培、羅庸、唐蘭、劉文典、游国恩、王力、沈從文の各先生。歴史系には著名な歴史学者の陳寅恪、雷海宗、錢穆、劉崇鋈、邵循正、向達、吳晗、鄭天挺の各先生。外国語系には外国語学・文学の専門家である吳宓、葉公超、莫泮芹、馮至、聞家駟、吳達元、陳嘉、柳無忌、錢鐘書、温徳(Robert Winter アメリカ国籍、清華大学、西南連合大学、北京大学で教え、中国で逝去)の各先生。数学系には著名な数学者の華羅庚、江澤涵、陳省身、楊武之(楊振寧の父)、姜立夫、申又振、趙訪熊、許宝騷の各先生。物理系には著名な物理学者の呉有訓、周培源、饒毓泰、葉企孫、鄭華熾、張文裕、王竹溪、趙忠堯、朱物華、吳大猷の各先生。化学系には著名な化学者の楊石先、曾昭掄、黃子卿、張子高、張大煜、錢思亮、孫承諤、嚴仁萌の各先生。地質・地理・気象系には著名な地学者の孫雲鑄、袁復礼、馮景蘭、王烈、張席提、林超、趙九章の各先生。生物系には著名な生物学者の李繼侗、張景鈺、陳禎、吳韞珍、殷宏章、沈同、湯佩松の各先生。政治系には著名な政治学者の張奚若、錢端升、羅隆基、邵循恪、蕭公權、王翰愚の各先生。経済系には著名な経済学者陳岱孫、趙迺博、周炳琳、伍啓元、蕭蓬、徐毓楠、滕茂桐、秦瓚の各先生。法律系には著名な法学者の戴修瓚、燕樹棠、陳瑾昆、蔡枢衡、費青、羅文干、芮沐の各先生。社会系には著名な社会学者の潘光旦、陳序經、費孝通、陳達、吳澤霖、李景漢の各先生。工学院にも少なからぬ著名な学者、例えば施嘉煬、劉仙洲、馬大猷、顧毓琇、任之恭、陶葆楷、庄前鼎、章名濤、閻振興、劉恢先、李輯祥、錢鐘韓といった先生がおられた。師範学院の教授の多くは、他の学院の教授が兼任していたため、ここでは繰り返さない。

上に挙げた専門家・学者は、彼らの学術面の業績をいちいち紹介するには相当に厚い本を一冊書かなければなるまいし、例えば、筆者が所属していた歴史系の歴史学の陳寅恪先生などを詳細に紹介するには、一人で一冊の専門書が必要なほどである。陳先生は中文、歴史の両系が共同で招聘した教授であり、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、日本語の各言語に精通し、モンゴル語、満州語、サンスクリット語、ペリ語、突厥語、ペルシャ語、シャム語、ギリシャ語、ラテン語、ハンガリー語、トルコ語にも明るく、また、歴史学、文学、文字学、歴史学史、文字史などの分野でいずれも造詣が深く、中国ならびに西洋の学問に通じ、他人の真似をすることなく自ら学派を為し、人々から「教授の中の教授」と呼ばれていた。当然、西南連合大学の教授が全て陳寅恪教授のように学界の泰斗ではなかったが、全体として見れば、その時代の最も傑出した学者の多くを招聘していたと見て全く差し支えなからう。

こうしたことが起こった理由は、当時の特殊な歴史的条件下で3校の著名大学の教授が集まり、まさにアメリカのイスラエル教授が述べているように、「中国北方の知識人の精鋭が結集したことが、西南連合大学をたちまち最上級の大学にしたのである⁵⁾。」西南連合大学の前後9年のうちに、同大で教えた教授は合計290人余り、副教授は48人であり、各年に教壇に立っていた教授は通常約180人であった(各年の在学生数は2,500~2,800人にすぎず、最多の1939年でも3,019人であり、平均して19人の学生に1人の教授がいたことになり、教授対学生の比率は比較的高いものであった)。これらの学者はその多くが中国の伝統文化の薫陶を受け、また「五・四運動」の洗礼を経て、強烈な愛国と科学的・民主的思想や仕事に対して責任をもつ精神を身につけていた。彼らの大多数は欧米に留学し、専門性が高く、博士号や修士号を獲得しており、外国から帰国したばかりで、世界の学術の最新状況を理解した若手の学者もいた。錢穆、羅常培、吳晗、沈從文といった外国留学をしたことのない少数の者も全て学術や創作の分野で多くの業績をもった著名な学者・専門家であった。西南連合大学の教授のうち、当時の中央研究院〔アカデミー〕の会員に選ばれていた者は26名であり、会員総数81人の3分の1近い、32.1%を占めていた。1941~45年度に教育部は5回の学術評定会を開催し、3等賞以上の学術成果293件を選び出したが、そのうち西南連合大学の教員の研究成果が32件、11%を占めた。その内訳を見ると、1等賞15件のうち、西南連合大学の教授が7件で46.6%を占めており、最高の学術賞を獲得したものの半数近くが、西南連合大学の教授の研究成果であったと言えるのである。さらに、西南連合大学の教授の少なからぬ著作が、教育部によって教材あるいは大学用教科書に選定され、例えば、錢穆の『国史大綱』、馮友蘭の『中国哲学史』など、その数は全部で数十種類を下らなかった。こうした状況からは、西南連合大学の教師陣が当時の中国の学術界、教育界で占めていた地位や役割を見ることができる。明らかに、これは西南連合大学が多数の人材を輩出する上で特に恵まれた最も重要な条件であろう。

西南連合大学の学生の素質はかなり良いものであった。長沙に大学を創り始めたとき、多く学生はもとの北京大学、清華大学、南開大学の未修了生たちであった。その後、西南連合大学が学生募集を開始したが、西南連合大学は北京、清華、南開という有名な3大学が連合して出来上がったものであって、学術水準は高く、早くからその名声は広く知れ渡っており、加えて、当時の国民党統治区全体で白色テロが横行していた中で、西南連合大学があった昆明の政治環境は比較的ゆったり

としていたために、学業成績が良く、思想も進歩的な多くの学生が西南連合大学を目指し、西南連合大学を第一志望にして受験したのである。受験生の数が多く、入学許可される定員には限りがあったため、優秀な者の中から特に優秀な者を選ぶということになったのである。例えば、1945年の夏、昆明地区の西南連合大学と雲南大学が連合して学生募集を行ったが、応募者は2,400人余りで、わずかに350人が入学許可になっただけであり、そのうち西南連合大学には132人が合格しただけであった。このことから選抜の厳しさを窺うことができよう。この他、優秀な学生の中には他の大学で学んだ後、西南連合大学に編入された者もいた。例えば、李政道や朱光亜はそれぞれ浙江大学と中央大学からの転学者であったが、これも西南連合大学の学術水準の高さが生み出した吸引力を示している。さらに、とくに指摘しておかなければならないのは、西南連合大学の学生の多くが被占領地区の出身者であり、心の中に国が破れ、家が滅んだ痛みを抱え、一家離散の苦しみを味わっており、愛国の情が深く、報国の思いが強く、学習に対する自覚もしっかりとしていたために、成績もかなり良かったということである。これも非常に重要な状況である。総じて、西南連合大学が人材の養成において多大の貢献を為し得たのは、「天下の英才を得て、これを教育したこと」が重要な条件であった。

第二に、西南連合大学は北京、清華、南開の3大学の優れた学風と「五・四」「一二・九」の栄光ある伝統を継承、発展させたことである。

北京大学は蔡元培が校長であったときから、「多くのことを兼ねて包容すること」や「学術の自由」を提唱し、清華大学は一貫して学業に対する厳しい要求を行うことで有名であり、南開大学は学生の実践能力を養成を重視することを特徴としてきた。北京大学は「五・四運動」の発源地であり、「一二・九運動」においては3大学がいずれも中心的勢力であって、「愛国、科学、民主」の伝統を創り上げていた。こうした優れた教育思想、学風、伝統が西南連合大学において全て継承され発展させられたのであり、3大学が結びつくことによって、それぞれ持ちつ持たれつで、益々立派になっていったのである。

教育思想の面では、西南連合大学は一貫して「多くのことを兼ねて包容すること」や「学術の自由」の精神を堅持した。西南連合大学の校務を中心となって掌握していた梅貽琦は1945年10月5日の日記の中で、「余は政治についての研究を深くは行っておらず、共産主義に関する認識も浅い。……校務に関しては蔡子民先生（子民は蔡元培の字）の多くのことを兼ねて包容する態度に追随し、学術の自由を徹底することを使命としなければならないと考えている。昔日のいわゆる新旧や、今日のいわゆる左右については、それらを学内で均しく自由に検討する機会を与えなければならない」と書いている。まさしくこうした考え方に指導され、西南連合大学の濃厚な民主的で自由な雰囲気が生まれたのである。早くも長沙臨時大学の時期に、張治中、陳誠といった国民党の高級将校に大学での講演を依頼すると同時に、獄中から出てきたばかりのもと中国共産党総書記の陳独秀や八路軍長沙弁事処の責任者で教育家の徐特立にも講演を頼んでいた。これは抗日戦争初期に国共合作がかなりうまく行き、国内に共同の敵に憤り立ち向かう優れた政治的雰囲気が溢れていたことに関係しているが、同時に大学が当初からずっと「多くのことを兼ねて包容する」伝統を継承し発展させていたことを反映している。こうした伝統は西南連合大学が存在していた全過程を通じて堅持され、

発展させられたのである。西南連合大学では、教員や学生は誰でもさまざまな観点に立つことができたし、極端な場合には、対立する学術および政治的観点も併存することができた。学生の間にはさまざまな観点の壁新聞や社団が同時に存在していたばかりではなく、教員の間にもさまざまな観点や学派が矛盾や衝突することなく併存していた。例えば、中国文学系では、ある教授は「中文系に入学したなら、中国語学・文字学・中国古典文学だけが研究でき」「新文学を学びたいなら、中国文学系に入ってはならない」と考えたが、別の教授は中文系の学生は中国語学・文字学や中国古典文学をしっかりと学ばかりでなく、現代漢語や現代文学も学ばなければならないと考えた。また、ある教授は「新体詩を一句詠むようなら、むしろ3年牢獄につながれたほうがましだ」と言い、他方、ある教授は学生が組織した新体詩の団体で喜んで指導に当たるといった具合であった。この他の学科でも、いくつかの異なった学派が存在した。人々はみなこうしたことを正常な現象と見なし、互いに排斥し合うことはなかった。大学ではしばしば各種の講座が催され、教授たちはそれぞれ自らの研究成果を発表し、自分の学術的見解を表明した。教室の内外には学術的に自由な空気がみなぎっていた。このことは学生が自立して考え、研究し検討する精神を養い、人材の成長にとって紛れもなくきわめて有利な条件となった。

教育思想の面では、西南連合大学にはもう一つの重要な特色があった。すなわち、ゼネラリストを養成し、基礎科目を重視し、学生の知識の幅を広げることが主張された点である。大学がゼネラリストを養成すべきだという主張は、蔡元培から梅貽琦に至る一貫した考え方であった。蔡元培は北京大学の学長に就任したとき、「学を治めるものを大学と呼ぶべきであって、術を治めるものは、これを高等専門学校と呼ぶことができる」と指摘している。梅貽琦は公表した『大学一解』の中で、「私見によれば、大学の期間中、『通』〔一般性〕と『専』〔専門性〕はともに配慮されねばならないが、重心を置くということになると、通に置かれるべきで、専に置かれるべきではない⁷⁾」と述べている。彼の主張はつまり、工科の学生であっても「工業の組織や指導的・理論的人材」を養成すべきであって、「一つの技術のみに秀でた職人」を育てるのではないというものであった。「多くのことを兼ねて包容すること」「学術の自由」ならびにゼネラリストの養成という考え方に導かれ、西南連合大学は学年制と単位制、選択科目と必修科目を結びつける制度を実行した。すなわち、各学生は4年間、132単位(30科目前後に相当)を履修しなければならず、各系の各学年にはいずれも若干の必修科目が開設されていたが、同時に全学の各系には多くの選択科目が置かれ、当該系および他系の学生が選択することができた。必修科目と選択科目の比率はおおよそ50対83であった。必修科目については追試は認められなかったが、再履修は可能であった。選択科目の多くは教授の独自の研究成果であり、その開設は学生の視野や知識の幅を広げた、彼らの考え方を活発、豊富にする上で長所があったばかりでなく、教員が学術研究を進めることを大いに奨励する機能も果たした。それゆえ、学内には濃厚な学術的雰囲気がいっぱい満ち満ちていた。こうした教育方法を実施していたために、西南連合大学が開設していた科目は毎年300科目以上にのぼり、8年間では1,600科目余りが開設され、まさに百花斉放、百家争鳴、多彩なものが入り乱れていたとすることができる。

ゼネラリスト養成の方針を貫くため、大学は基礎課程の教育を非常に重視し、大学1年次は全て基礎課程に充てられ、しかも学識があり専門性が高く、教育経験も豊富な教授が授業を担当してい

た。筆者が1年次にいたとき、「中国通史」を講じていたのは呉晗であり、「経済学概論」は陳岱孫というように、いずれも名教授ばかりであった。大学1年次の共通必修科目には国文、英語、中国通史があり、この他にも、文・法学院の学生であれ、理・工学院の学生であれ、すべて社会科学（政治学、経済学、社会学、法学）概論を1科目、自然科学（物理学、化学、生物学、地質学）概論1科目を選択しなければならないと規定されていた。例えば、筆者は歴史系の学生であったが、自然科学1科目を選択しなければならず、馮景蘭教授が講じていた普通地質学を取った。このことは勿論、このようにすればすぐに文・理双方に通じるようになるというのではなく、ゼネラリストとなり、かなり幅広い知識を身につけるべきで、一つの専門に囚われ、狭量になってはならないということに関して一つの糸口を指し示しているのである。こうした教育の下で、われわれは確かに利益を受けるところが大であり、視野は広がり、ものの考え方もそれほど狭くならなかった。

西南連合大学は一方で学術の自由を提唱していながら、勉学上の要求に関してはきわめて厳格であった。毎学期の初め、学生は決まった期日に大学で登録を行わなければならない、その期日に遅れ、休暇願いを出していなかった者については、1日遅れるたびに授業を理由なく2時間さぼったものと見なされ、2週間遅れた者は休学扱いとされた。休暇願いが4週間になると、科目を選ぶことができなくなり、休学1年を命じられた。期末試験に不合格の者は追試を受けられず、単位も与えられず、零点扱いになった。不合格者は、その科目が選択科目であれば他の選択科目で単位の不足を補うことができたが、必修科目であれば、翌年改めて履修しなければならなかった。連続性のある基礎科目については、先行する科目が不合格であれば、後続の科目を受講することはできない、等々であった。工学院の学生に対する学業面での要求はとくに厳しく、試験も多かった。それゆえ、西南連合大学では期日どおりに卒業するのは容易ではなかった。

西南連合大学では、学生は学業の面で優れた教育を受けたのみならず、「五・四」や「一二・九」の栄光ある伝統のおかげで、誰もが思想的に大いに進歩した。西南連合大学では、「愛国、科学、民主」が政治生活と学習生活において常に中心であった。1941年初頭に皖南事変が起こった後の一時期に学内の空気が比較的沈滞したのを除き、ほとんどの時期において学生の思想や活動は活発であり、社団が林立し、壁新聞は壁を埋め尽くし、しばしば各種の講座が催された。さらに、学生は課外の時間を利用して歌謡・演劇の公演といった各種の活動を展開し、休暇の時期を利用して工場、農村、地方の部隊、少数民族地区などに赴いて現実に触れ、活動を展開し、鍛錬を受けた。とくに1944年に「五・四」を記念する活動を行って以来、愛国・民主の運動が勢いよく展開し、運動の高まりが次々と起こり、全国を揺るがせた「一二・一運動」の爆発まで続いた。これは全国の政治闘争に大きな影響を及ぼしたのみならず、学生自身にとっても大変な教育と鍛錬となった。

西南連合大学の終結時に建立された「国立西南連合大学記念碑」の碑文には、西南連合大学に「記念すべきもの、けだし四つあり」「連合大学は多くのことを兼ねて包容する精神をもって、社会における時代の気風を変え、内には学術自由のしくみを打ち立て、外からは『民主の堡壘』の称号を与えられ、大勢の者に迎合することなく、唯一人でも憚らずに直言する、これらが記念すべき三つのことである⁸⁾」と記されている。これは連大精神を実にうまく要約しており、西南連合大学から生まれた人材が多数にのぼることの重要な原因である。

第三に、抗日戦争時期の雲南が、西南連合大学に対して比較的ゆったりとした政治環境を提供したことである。

抗日戦争の全期間の中で、初期の1、2年のみに国共合作が比較的うまく行き、全国の政治的雰囲気は比較的ゆったりとして活気を帯びていた。抗日戦争が持久戦の段階に入ると、国民党政府は「消極抗日、積極反共」の政策をとり、とくに皖南事変以後、白色テロが日増しに深刻になっていった。もし西南連合大学が雲南にではなく、大後方の他の地方に存在し、例えば、政府が数度にわたって連合大学に四川省への移転を促したときに、その命令に従って動いていたなら、連合大学の「多くのことを兼ねて包容すること」や「学術の自由」、教員と学生の政治および社会・文化活動がこのように発展することは絶対に不可能であり、必ず規制、ついには鎮圧に遭遇していたであろう。そうなれば、西南連合大学はあのように多くの貢献をすることは絶対に不可能であった。幸運だったのは西南連合大学が雲南にあったことである。当時の国民党の中央当局は他者を排斥し続け、絶えず地方勢力を併呑したいと考えていたために、地方の実力派との間に先鋭な矛盾を生じていた。当時、雲南省主席に任じられて軍事委員会委員長昆明軍営主任を兼ね、強力な軍勢をかかえていた地方実力派の龍雲は共産党および民主同盟との関係を持ち、政治的には比較的開明的であり、国民党中央当局の圧力を決然として抑え、国民党の特務が昆明で進歩的な教員や学生を逮捕するのを許さなかった。そのために、抗日戦争期の全体を通じて、雲南省および昆明市の政治環境は比較的ゆったりとしており、このことが西南連合大学が自らの大学運営方針を堅持する上で、また連合大学の教員と学生の進歩的運動にとって有利な条件を提供した。抗日戦争に勝利した後、前々から地方勢力を消滅させたいと考えていた蒋介石は、龍雲の部隊をベトナムに赴いて日本軍の降伏処理に当たるという口実で移動させた。そして、同部隊が未だ国境を越えていないときに、昆明付近に駐在していた直系の杜聿明の部下に密かに命じて、1945年10月3日、昆明城内の雲南省政府および龍雲の公邸に侵攻させ、龍雲に昆明を離れて重慶に行くよう迫り、名目は軍事参議院々長への就任ながら、実際には軟禁してしまった。こうなると、雲南の政治的局面にはたちまち大きな変化が生じ、西南連合大学は白色テロの真只中に置かれることになり、やがて4名の教員・学生が殺害された「一二・一事件」が発生したのである。こうした正反両面の状況は、いずれも西南連合大学の興隆・衰微や成功・失敗が雲南の政治環境と密接に関係していたことを説明している。この点については、アメリカのジョン・イスラエル教授も理解を示している。彼は、西南連合大学が戦時期に中国で最も政治的活力をそなえた大学になったのは、「部分的には雲南の統治者・龍雲の厚い保護によるものである⁹⁾」と述べている。さらに彼は、「連合大学について分析するのに、共産党の役割に言及しないでは完全に分析したということとはできない。献身的精神や厳格な規律を身につけた昆明の地下黨員は、周恩来が指導する重慶を基地とする南方局からの指示を受けていたものである。この党の少なからぬメンバーは西南連合大学の学生であり、その果たした役割は黨員の数の少なさに比べて、きわめて不釣り合いなものである¹⁰⁾」。彼のこうした言葉はすべて実際の状況に合致している。

中国の古い言葉に「深刻な憂慮が聖人を導く」「艱難辛苦、汝を玉にする」というのがある。西南連合大学が短い時間で重要な貢献をなしたのは抗日戦争というあの時代と当然のことながら密接な関係があり、もし抗日戦争がなければ西南連合大学もまったく有り得なかったのである。しかし、

同じくあの時代にあっても、全ての大学が同様の貢献をなしたわけではない。従って、西南連合大学がなした際立った貢献について研究しようと思えば、具体的な状況について具体的に分析し、西南連合大学がそなえていた独特の条件を見いださねばならない。われわれ自身の体験と感覚から言えば、上述した3つの点こそが西南連合大学の西南連合大学たる所以である。それはありふれていて、取り立てて深遠な秘訣があるということではなさそうだが、非常に重要なポイントには違いない。

時は流れ、またたく間に今年はずでに西南連合大学の創立60周年を迎えた。われわれのこの母校が仮にずっと存続していたならば、すでに還暦の年を迎えることになり、われわれ西南連合大学の学生もすでに古希の年齢を過ぎてしまった。当時の厳しく険しい歳月を振り返れば感慨無量であり、中国にかつてこのような賞賛に値する大学が存在し、それが新中国の誕生と発展に対して独特の貢献をなしたことは深く誇りとするところである。西南連合大学の多くの経験は今に至るも依然として人々に有益な啓示を与えうるものなのである。

(1997年3月28日 脱稿)

【注】

- 1) 「国立西南聯合大学紀念碑」, 西南聯合大学北京校友会校史編輯委員會編『国立西南聯合大学校史資料』, 北京大学出版社・雲南人民出版社, 1986年, 134頁。
- 2) 楊振寧「科技發展的歷史與最近幾十年科技發展・經濟發展的關係」は, 1997年3月24日付け『参考消息』の「楊振寧談科技發展進程」と題する文章に所収されている。
- 3) 王達「一個对西南聯大着迷的美国人—訪弗吉尼亚大学教授易社強」, 『西南聯合大学暨雲南師大建校五十周年紀念集』(『雲南師範大学学报・哲学社会科学版』1988年校慶增刊号), 98頁。
- 4) 梅貽琦「就職演説」, 劉述礼・黄延復編『梅貽琦教育論著選』, 人民教育出版社, 1993年, 10頁および「教授の責任—在廿一年度開學典禮上的講話」, 同上書, 24頁〔この言葉は, 孟子の「所謂故国者, 非謂有喬木之謂也, 有世民之有也」を梅貽琦がひねったものであるという—訳注〕。
- 5) 易社強「西南聯大五十周年紀念」, 前掲『西南聯合大学暨雲南師大建校五十周年紀念集』, 92頁
- 6) 梅貽琦「対戦後清華發展之理想」, 劉述礼・黄延復編, 前掲書, 132頁。
- 7) 梅貽琦「大学一解」, 劉述礼・黄延復編, 前掲書, 105頁。
- 8) 前掲, 『国立西南聯合大学校史資料』, 134頁。
- 9) 前掲, 易社強論文, 92頁。
- 10) 同上書, 94頁。